

都鳥の碑（上）

春日部八幡神社表参道入口の左隅に建立されている碑（高さ3・37メートル、幅1・8メートルの石碑）を都鳥の碑という。

伊勢物語で名高い在原業平朝臣（第五十一代平城天皇の皇子阿保親王の第五子で、古今集の歌人）は、藤原氏の権勢が日毎につのりゆくのを憤って、心は常に穏やかならず、平安の都に住むのもいとわしくなり、東國に住むべき処を求めて下って行った。そうして旅枕をかさねて、武蔵國と下総國との境にある隅田川の渡し場に着いたとき川の水面に遊ぶくちばしと足が赤く翼の白い水鳥の群れを見て、都では見たこともない鳥と思い、渡し守に尋ねた。渡し守は「みやこ鳥」と答えたので、業平は京都のことを思い出して、ひしひしと迫る旅愁とともに懐旧の想いに心乱れて

「名にしおば いざ言問はん都鳥 わが思う人は ありやなしやと」と歌をよまれた、という。

伊勢物語の九の後段に、つぎのように記されている。

猶^{なほ}行きゆきて、武蔵の國と下つ総の國との中に、いと大きな河あり。それをすみだ河といふ。その河のほとりにむれゐて思ひやれば、限りなくとほくも来にけるかなとわびあへるに、渡守、「はや舟に乗れ、日も暮れぬ」といふに乗りて渡らんとするに、皆人物わびしくて、京に思う人なきにしもあらず。さるおりしも、白き鳥の嘴^{くちばし}と脚と赤き、鳴^{しき}の大ききなる、水のうへに遊びつつ魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人見知らず。渡守に問ひければ、「これなん宮ごどり」といふをききて、「名にし負はば いざ言問はむ 宮ご鳥 わが思う人は ありやなしやと」とよめりければ、舟ごぞりて泣けり。

業平の物語の時代は平安期であり、この時代から室町時代までは隅田川が武蔵・下総の國境だったと伝えられている。

昔の利根川（現在の古利根川）や隅田川（現在の古隅田川）は大河であったようである。（川の流れがまだ一定していない濫流時代であったためか）今の川よりも川幅も広がったであろうが、その後たびたびの洪水によって土砂が堆積して、流路も変遷し、川幅もせばまったものと考えられる。

春日部八幡神社境内付近は、利根砂丘の名残りであると伝えられていることから想像できる。

隅田川は、今は流れも細くなつて、名も古隅田川と変わっている。この川の流域にある新方袋の満蔵寺門前
にある梅若塚の伝説と同時に、このあたりが武蔵國と下総國の境あたりであつて、陸奥への古道の通じていた
ことがうかがえる。

この業平の故事を後世に遺そうとして、江戸末期の嘉永六年五月、当時の粕壁宿名主であつた関根次郎兵衛
孝熙（安政四年五月二十一日没 七十五歳）が、千種正三位源ちぐさしやうさんみみなもとのありこと有功に依頼して、その由緒および八幡社
の由緒を碑に刻したものが「都鳥の碑」である。

つづく

初出「広報かすかべ 昭和五十五年一月」かすかべの歴史余話